

熊野を楽しむ達人の会 第13回例会  
『庚申さん』その1  
～熊野市飛鳥町 初庚申のにぎわい～

- 実施日： 平成19年1月26日（金）
- 場所： 熊野市飛鳥町
- 参加者： 10名（女性5名、男性5名）

「熊野を楽しむ達人の会」では第13回の例会『庚申さん』を1月26日の初庚申の日に合わせて、開催しました。飛鳥町小阪から出発して6ヶ所の庚申を歩いて巡り、その中でこの日に神山にある庚申のお祭りに参加しました。

庚申とは暦上で、十干十二支を組み合わせると60通りになり、60日に一度巡ってくる「庚申」の日、または60ヶ月、60年に一度巡ってくる庚申月、庚申年のことを言います。道教では人間の中で三尸（さんし）の虫があり、庚申の夜になると人間の体から抜け出して天に昇り、天帝に人間の報告を行うので、その報告により人間の寿命が短くなると考えられてきました。そこで、皇族や貴族の間で三尸の虫が抜け出せないように眠らずに身を慎んで徹夜で過ごすということが行われてきました。このことを「守庚申」、「庚申待ち」といいます。後に庶民の間にも広がり、三尸の虫を食べてしまうという「青面金剛」を拝むようになり、「庚申」の文字や青面金剛像を彫った石塔を建立するようになったといわれています。

熊野市飛鳥町の飛鳥神社の近くにある「本郷の庚申」、佐渡の「岡地の庚申」、「はせどの庚申」の石碑は青面金剛を浮き彫りにしたものでした。「はせどの庚申」ではどなたかこの庚申さんに願掛けをしてお参りをしたのか、庚申さんに縄が縛りつけられていました。「野口の庚申」はこの日巡った庚申の中で唯一「庚申」の文字を彫った石塔です。近所の方にお話を伺うと霊験があらたかで、お参りに来る人の姿がよく見られるとの事でした。



「野口の庚申」

途中、神山の南朝遺蹟のある光福寺に寄り、秋田殖康住職から市指定文化財の石宝殿、尊雅王位牌の説明を受けたあと、尊雅王の位牌と庚申の日にちなんで青面金剛の掛け軸を拝見しました。また、「無学」、「無分別」などの言葉を例に観音経の説法を話していただきました。

光福寺から山手に上がったところに「神山の庚申」があります。庚申さんの幟が揚げられ、祭りには地元の方が沢山来ていました。この庚申さんは林道の建設で移転したにもかかわらず立派な切石で囲っています。庚申さんは元禄時代に作られたもので市内では最も古いものだそうです。囲いの後ろにもう一体あり、これは約80センチの高さのある庚申さんで、明治に作られたものです。両体とも青面金剛が彫られています。



「千軒平の庚申」

光福寺の秋田住職が来られ庚申さんに般若心経やご真言などを挙げられました。お経をいただいた後は、餅ほり（餅撒き）が行われ、日頃からこの庚申さんのお世話をしている山本田米男さん、保史さん親子のご家族が餅を撒き、訪れた人が歓声を上げて拾います。私たちが参加して餅を拾った後は山本さんや地元の方が用意されたぜんざい、煮物、炊き込みご飯をふるまっていただきました。その後、この日最後に巡る「千軒平の庚申」に向うため、神山を後にしました。

広く信仰を集めている庚申ですが、近頃は住む人が少なくなったり高齢化のためお祭りが無くなってしまい、各自がお参りするようになってしまったところがあります。地元の方の話では昔に比べたら祭りに来る人、子供の姿が少なくなったといいます。庶民が庚申さんを身近に信仰してきた文化がこれから先、時代が移り変わってもずっと大切にされていくことを願います。

今日参加いただいた会員の方からは「庚申さんが身近に感じられるようになったし、久しぶりにお餅を拾い童心に帰りました。」「どこか懐かしく感じられる田畑の景色を見ながらゆっくりと歩き、癒された。」「これからも大切に残して行ってほしい。」などの感想をいただきました。

以上